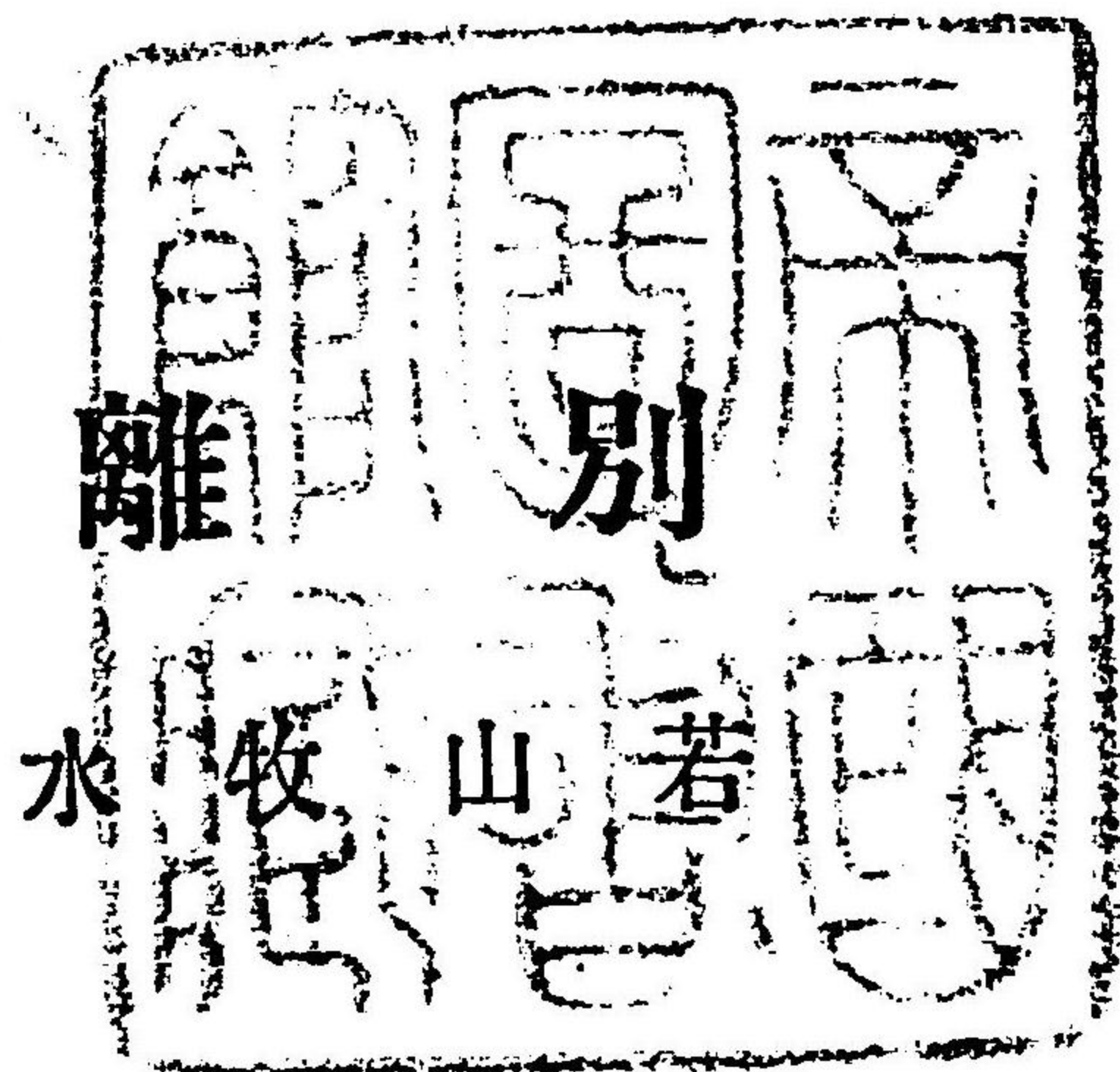




29-325



版藏堂雲東

自序

廿歳頃より詠んだ歌の中から一千首を
抜き、一卷に輯めて『別離』と名づけ、今度出版
するここにしました。昨日までの自己に深く別
れ去らうとするところに外ならぬ。

先に著した『獨り歌へる』の序文に私は、私
の歌の一首一首は私の命のあゆみの一歩
一歩であるとして書いておいた。また、一歩あゆ
んでは小さな墓を一つ築いて来てゐる様
なものであるとも書いておいた。それらの
歌が背後につづいて居ることは現在の私
にとつて、可憐しくもまた少なからぬ苦痛

であり負債である、如何かしてそれらと絶縁したいといふ念願からそれを一まとめにして留めておかうとするのである。然うして全然過去から脱却して、自由な解放せられた身になつて、今まで知らなかつた新たな自己に親しんで行き度いとおもふ。また、昨年あたりで私の或る一期の生活は殆ど名残なく終りを告げて居る。そして丁度昨年は人生の半ばといふ廿五歳であつた。それやこれや、この春この『別離』を出版しておくのは甚だ適當なことであると私は歎んで居る。

本書の装幀一切は石井柏亭氏を煩はした。寫眞は一昨年の初夏に撮つたものである、この一卷に収められた歌の時期の中間に位するものなので挿入しておいた。歌の掲載の順序は歌の出來た時の順序に従うた。

左様なら、過ぎ行くものよ、これを期として我等はもう永久に逢ふまい。

明治四十三年四月六日

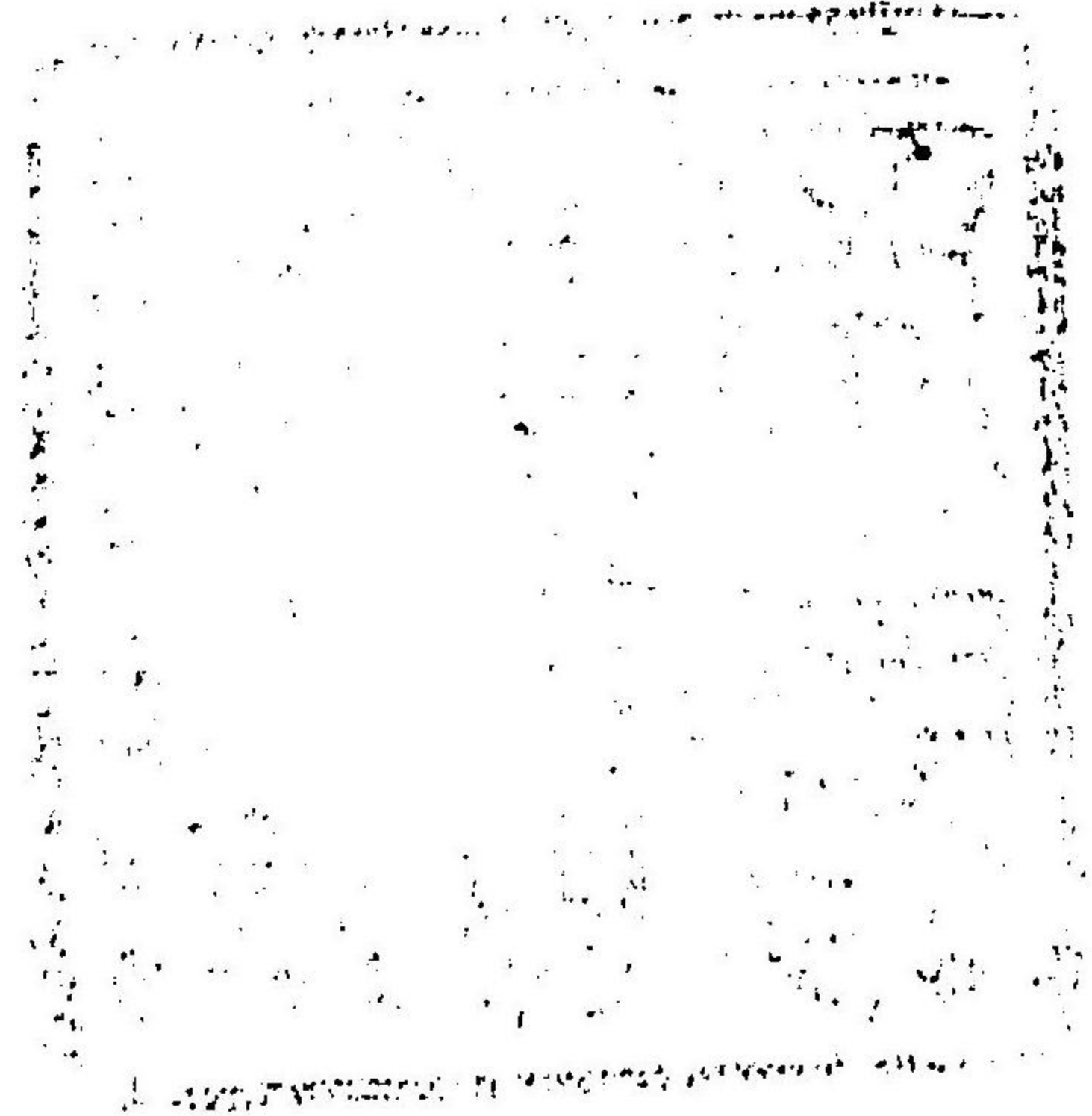
著者

別

離

上

卷



○水の音に似て啼く鳥よ山ざくら松にまぢれる深山の晝を

自明治三十七年四月
至同 四十一年三月

○ なにとなきさびしさ覺え山ざくら花ちるか
げに日を仰ぎ見る

○ 山越えて空わたりゆく遠鳴の風ある日なり
やまざくら花

○ 朝地震す空はかすかに嵐して一山白きやま
ざくらばな

○ 行きつくせば浪青やかにうねりぬ山ざく
らなど咲きそめし町

○ 朝の室夢のちぎれの落ち散れるさまにちり
入る山ざくらかな

○ 阿蘇の街道大津の宿に別れつる役者の髪
の山ざくら花

○ 母戀こひしかかるゆふべのふるさとの櫻咲くら
む山の姿よ

○ 父母ちちははよ神にも似たるこしかたに思ひ出あり
や山ざくら花

○ 春は來ぬ老いにし父の御みひとみに白しろううつ
らむ山ざくら花

○ 怨みあまり切らむと云ひしくろ髪に白しろ躑つとむ躑つとむ
さすゆく春のひと

○ 忍草雨しのぶあめしづかなりかかる夜はつれなき人を
よく泣かせつる

○ 山脈やまなみや水あさぎなるあけぼのの空をながる
る木の香かほりかな

日向の國むら立つ山のひと山に住む母戀し
秋晴の日や

君が背戸や暗よりいてほの白み月のなか
なる花月見草

蝉や寝ものがたりの折り折りに涙もまぢる
ふるさとの家

秋あさし海ゆく雲の夕照りに背戸の竹の葉
うす明りする

朝寒や萩に照る日をなつかしみ照らされに
出し黒かみのひと

別れ来て船にのぼれば旅人のひとりとなり
ぬはつ秋の海

○ 秋風は木の間に流る一しきり桔梗色してや
がて暮るる雲

○ 白桔梗君とあゆみし初秋の林の雲の静けさ
に似て

○ 思ひ出れば秋咲く木木の花に似てこころ香
りぬ別れ來し日や

○ 秋立ちぬわれを泣かせて泣き死なす石とつ
れなき人戀しけれ

○ この家は男ばかりの添寝ぞとるやさや風の
樹に鳴る夜なり

○ 木の蔭や悲しさに吹く笛の音はさやるもの
なし野にそらに行く

✓ 吾木香すすきかるかや秋くさのさびしさ
はみ君におくらむ

○ 秋晴や空にはたえず遠白き雲の生れて風あ
る日なり

○ 秋の雲梯と榛との樹樹の間にうかべるを見
て人も語らず

○ 幹に倚り頬をよすればほのかにも頬に脈う
つ秋立木かな

○ 机のうへ植木の鉢の黒土に萌えいづる芽あ
り秋の夜の灯よ

○ 秋の灯や壁にかかれる古帽子袴のさまも身
にしむ夜なり

○ 富士よゆるせ今宵は何の故もなう涙はてなし
汝を仰ぎて

○ 日が歩むかの弓形のを空の青ひとすぢの
みちのさびしさ

○ 悲しさのあふるるままに秋のそら日のいろ
に似る笛吹きいてむ

○ 山ざくら花のつぼみの花となる間のいのち
の戀もせしかな

○ 淋しとや淋しきかぎりはてもなうあゆませ
たまへ如何にとかせむ (人へかへし)

○ うらこひしさやかに戀とならぬまに別れて
遠ざるまなまの人

ぬれ衣のなき名をひとにうたはれて美しう
居るうら寂しさを

春たてば秋さる見ればものごとくに驚きやま
ぬ暈の若さかな

町はづれきたなき溝の匂ひ出るたそがれ時
をみそさざい啼く

植木屋は無口のをとこ常磐樹の青き葉を刈
る春の雨の日

船なりき春の夜なりき瀬戸なりき旅の女と
酌みしさかづき

春の森青き幹ひくのかぎりの音と木の香と
鏡うぐひすと

ただひとり小野の樹に倚り深みゆく春のゆ
ふべをなつかしむかな

わたつみのそこひもわかぬわが胸のなやみ
知らむと啼くか春の鳥

ゆく春の月のひかりのさみどりの遠をさま
よふ悲しき聲よ

雲ふたつ合はむとしてはまた遠く分れて消
えぬ春の青ぞら

眼とづればこころしづかに音をたてぬ雲遠
見ゆる行く春のまど

鶯のふと啼きやめばひとしきり風わたるな
り青木が原を

○ 椎の樹の暮れゆく蔭の古軒の柱より見ゆ遠
山を焼く

○ 春来ては今年も咲きぬなにといふ名どとも
知らぬ背戸の山の樹

○ 町はづれ煙筒もるる青煙のにほひ迷へる春
木立かな

○ われはいま暮れなむとする雲を見る街は夕
の鐘しきりなり

✓ 淋しくばかなしき歌のおほからむ見まほし
さよと文かへし來ぬ

○ 人どよむ春の街ゆきふともふふるさとの
海の鷗啼く聲

○ 街の聲うしろに和むわれらいま湖さす河の
春の夜を見る

○ 春の夜や誰ぞまだ寝ぬ厨なる甕に水さす音
のしめやかに

○ 春の夜の月のあはきに厨の戸誰が開けすて
し灯のながれたる

○ 日は寂し萬樹の落葉はらはらに空の沈黙を
うちそそれども

○ 見よ秋の日のもと木草ひそまりていま凋落
の黄を浴びむとす

○ 鋤をあげまた鋤おろしこつこつと秋の地を
堀る農人どもよ

うすみどりうすき羽根着るささ蟲の身がま
へすあはれ鳴さいづるらむ

うつろなる秋のあめつち白日のうつろの光
ひたあふれつつ

秋眞晝青きひかりにただよへる木立がくれ
の家に雲見る

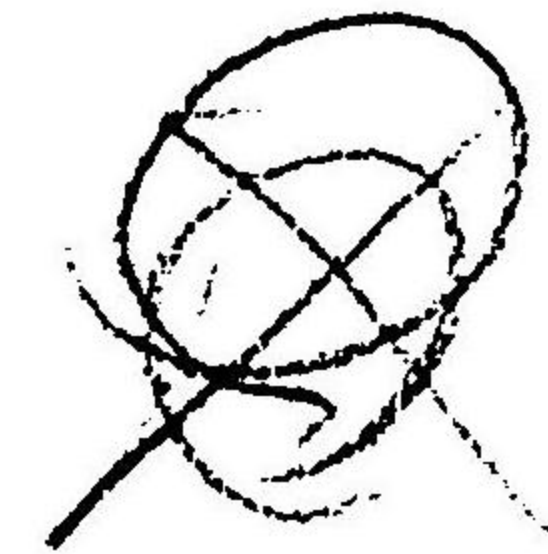
落日や街の塔の上金色に光れど鐘はなほ鳴
りいでず

啼きもせぬ白羽の鳥よ河口は赤う濁りて時
雨晴れし日

さらばとてさと見合せし額髪のかげなる瞳
えは忘れめや (二首秀環との別れに)

○別れてしそのたまゆらよ虚なる双のわが眼
にうつる秋の日

いま瞑ぢむ寂しき瞳明らかに君は何をかう
つしたりけむ (途中大阪にかれば逝きぬ)



短かりし君がいのちのなかに見ゆきはまり
知らぬ清ささびしさ

○窓ちかき秋の樹の間に遠白き雲の見え来て
寂しき日なり

○酒の香の戀しき日なり常磐樹に秋のひかり
をうち眺めつつ

○見てあれば一葉先づ落ちまた落ちぬ何おも
ふとや夕日の大樹

をちこちに亂れて汽笛鳴りかはすああ都會
よ見よ今日もまた暮れぬ

海の聲断えむとしてはまた起る地に人は生
れまた人を生む

人といふものあり海の眞蒼なる底にくぐり
て魚をとりて食む

山茶花は咲きぬこぼれぬ逢ふを欲りまたほ
りもせず日経ぬ月経ぬ

遠山の峰の上にさゆるゆく春の落日のごと
戀ひ死にも得ば

秋の夜やこよひは君の薄化粧さびしきほど
に静かなるかな

世のつねのよもやまがたり何にさは涙さし
ぐむ灯のかげの人

君去^いにてももの小本^{こほん}のちらばれるうへにし
づけき秋の灯^{ともし}よ

いと遠き笛を聴くがにうなだれて秋の灯^ひの
まへものをこそおもへ

相見ればあらぬかたのみうちまもり涙たた
えしひとの瞳よ

君は知らじ君の駒寄^{なま}るを忌^いむごときはかな
ごころのうらさびしさを

落葉^た焚^たくあをさけむりはほそほそと木の間
を縫^ぬひて夕空^{ゆふぞら}へ行く

○ 静けさや君が裁縫しきぬの手をとめて菊見るさま
をふと思ふとき

○ 相見ねば見む日をおもひ相見ては見ぬ日を
思おもふさびしきころ

○ ふとしては君を避けつつただ一人泣くがう
れしき日もまぢるかな

○ 黄に匂ふ悲しきかぎり思ひ倦うじ對むかへる山の
秋の日のいろ

○ 一葉ひとはだに揺れず大樹おほきは夕ぐれのわが泣く窓
に押しせまり立つ

旅ゆきてうたへる歌をつぎにまさめたり思
ひ出にたよりよかれとて

山の雨しばしば軒の椎の樹にふりきてなが
き夜の灯かな (百草山にて)

立川の驛の古茶屋さくら樹の紅葉のかげに
見おくりし子よ

旅人は伏目にすぐる町はづれ白壁ぞひに咲
く芙蓉かな (日野にて)

家につづく有明白き萱原に露さはなれや鶉
しば啼く

あぶら灯やすすき野はしる雨汽車にほほけ
し顔の十あまりかな

戸をくれば朝寝の人の黒かみに霧ながれよ
る松なかの家 (三首御歌にて)

霧ふるや細目にあけし障子よりほの白き秋
の世の見ゆるかな

霧白ししとしと落つる竹の葉の露ひねもす
や月となりけり

野の坂の春の木立の葉がくれに古き宿見ゆ
武藏の青梅

なつかしき春の山かな山すそをわれは旅び
と君おもひ行く (五首高尾山にて)

思ひあまり宿の戸押せば和やかに春の山見
ゆうち泣かるかな

地ふめど草鞋聲なし山ざくら咲きなむとす
る山の静けさ

○ 山静けし峰の上をにのこる春の日の夕かげ淡
しあはれ水の聲

○ 春の夜の匂へる闇のをちこちによこたはる
なり木きの芽かふく山

○ 汽車過ぎし小野の停車場ちやうば春の夜を老いし驛
夫のたたずめるあり

○ 日のひかり水のひかりの一いろに濁れるゆ
ふべ大利根わたる

○ 大河よ無限むげんに走れ秋の日の照る國ばらを海
に入るなかれ

○ 松の實や楓の花や仁和寺にんわじの夏なほわかし山
ほととぎす (京都にて)

桃柑子芭蕉の寶賣る磯街の露店の油煙青海
にゆく (下の圖にて)

あをあをと月無き夜を満ちきたりまたひき
てゆく大海の潮 (日本海を見て)

旅ゆけば腫瘦するかゆきずりの女みながら
美からぬはなし

安藝の國越えて長門にまたこえて豊の國ゆ
き杜鵑聴く (三首耶馬溪にて)

ただ戀しうらみ怒りは影もなし暮れて旅籠
の欄に倚るとき

白つゆか玉かとも見よわたの原青さうへゆ
き人戀ふる身を (二十三首南日向を巡りて)

潮光る南の夏の海走り日を仰げども愁ひ消
やらず

わが涙いま自由なれや雲は照り潮ひかれる
帆柱のかげ

檳榔樹の古樹を想へその葉蔭海見て石に似
る男をも (日向の青島より人へ)

山上や目路のかぎりのをちこちの河光るな
り落日の國 (日向大隅の界にて)

椰子の實を拾ひつ秋の海黒きなぎさに立ち
て日にかざし見る (三首都井岬にて)

あはれあれかすかに聲す拾ひつる椰子のう
つろの流れ實吹けば

日向の國都井の岬の青潮に入りゆく端に獨り海見る

黄昏の河を渡るや乗合の牛等鳴き出ぬ黄の山の雲

酔ひ痴れて酒袋如すわがむくる砂に落ち散り青海を見る

船はてて上れる國は満天の星くづのなかに山匂ひ立つ (日向の油津にて)

山聳ゆ海よこたはるその間に狭しま白し夏の砂原

遊君の紅き袖ふり手をかさしをとこ待つらむ港早や來よ

✓
南國の港のほこり遊君の美なるを見よと帆
はさんざめく

○
大うねり風にさからひ青うゆくそのいただ
きの白玉の波

○
大隅の海を走るや乗合の少女が髪のよく匂
ふかな

○
船酔のうら若き母の胸に倚り海をよろこぶ
やよみどり兒よ

○
落日や白く光りて飛魚のとぶ聲しげし秋風
の海

○
港口夜の山そびゆわが船のちひさなるかな
沖さして行く

○ 帆柱ぞ寂然としてそらをさす風死せし白晝
の海の青さよ

○ かたかたとかたき音して秋更けし沖の青な
み帆のしたにうつ

○ 風ひたと落ちて眞鐵の青空ゆ星ふりそめぬ
つかれし海に

○ 山かげの闇に吸はれてわが船はみなとに入
りぬ汽笛長う鳴る

○ 夕さればいつしか雲は降り来て峯に寝るな
り日向高千穂

○ 秋の蟬うちみだれ鳴く夕山の樹蔭に立てば
雲のゆく見ゆ

樹間こまがくれ見居みをれば阿蘇あその青烟あせはかすかに
さえぬ秋あきの遠空とほぞら (以下七首阿蘇にて)

山鳴やまなりに馴なれては月の白しろき夜よをやすらに眠ねる
肥ひの國くに人びとよ

ひれ伏ふして地ちの底そことほき火ひを見ると人ひとの五
つが赤あかかりし面おもて

麓野ふもとの國くににすまへる萬人まんじんを軒のきに立たせて阿
蘇あそ荒あるるかな

風かぜさやさや裾野すその秋あきの樹きにたちぬ阿蘇あその月つき
夜よのその大おほきさや

むらむらと中なかつぞら掩おほふ阿蘇山あそやまのけむりのな
かの黄あはなる秋あきの日ひ

○ 秋のそらうらぶれ雲は霧のごと阿蘇にっど
ひて凧ぎぬる日なり

○ 海の上の空に風吹き陸の上の山に雲居り日
は帆のうへに (六首周防灘にて)

○ やや赤む暮雲を遠き陸の上にながめて秋の
海馳するかな

○ 落日のひかり海去り帆をも去りぬ死せしか
風はまた眉に來ず

○ 夕雲のひろさいくばくわだつみの黒さを掩
ひ日を包み燃ゆ

○ 雲は燃え日は落つ船の旅びとの代赅の面の
その沈黙よ

水に棲み夜光る蟲は青やかにひかりぬ秋の
海匂ふかな

津の國は酒の國なり三夜二夜飲みて更らな
る旅つづけなむ

杯を口にふくめば干すぢみな髪も匂ふか身
はかるらかに

白雲のかからぬはなし津の國の古塔に望む
初秋の山 (四天王寺に登りて)

山行けば青の木草に日は照れり何に悲しむ
わがところぞも (箕面山にて)

泣真似の上手なりける小女のさすがなりけ
り忘れもせず

○ 浪華女に戀すまじいぞ旅人よただ見て通れ
そのながしめを

○ われ車に友は柱に一語二語酔語かはして別
れ去りにけり (大阪に菟水と別る)

○ 酔うて入り酔うて浪華を出てて行く旅びと
に降る初秋の雨

○ 昨日飲みけふ飲み酒に死にもせで白痴笑ひ
しつとなほ旅路ゆく

○ 住吉は青のはちす葉白の砂秋たちをむる松
風の聲

○ 秋雨の葛城越えて白雲のただよふもとの紀
の國を見る

○ 火事の火の光り宿して夜の雲は赤う明りつ
空流れゆく (二首和歌山にて)

○ 町の火事雨雲おほき夜の空にみだれて鶯の
啼きかはすかな (紀の國青岸にて)

○ ちんちろり男ばかりの酒の夜をあれちんち
ろり鳴さいづるかな

○ 紀の川は海に入るとて千本の松のなかゆく
その瑠璃の水

○ 麓には潮ぞさしひく紀三井寺木の間の塔に
青し古鐘

○ 一の札所第二の札所紀の國の番の御寺をい
ざ巡りてむ

粉河寺こながわ遍路へんろの衆のうち鳴らす鉦かねもさこゆ秋の樹の間に

鉦かねのなかにたたずみ旅びとのわれもをろがむ秋の大寺

旅人よ地に臥せ空ゆあふれては秋山河にいま流れ来る (葛城山にて)

鐘かねおほき古ふるりし町かな折しもあれ旅籠はたごに着さしその黄昏たそがれに (三首奈真にて)

鐵てつ断えず麓ふもとにおこる嫩草わかぐさの山にわれ立ち白晝ひるの雲見る

雲やゆくわが地やうごく秋眞晝鉦も鳴らざる古寺にして (三首法隆寺にて)

○ 秋眞晝ふるき御寺にわれ一人立ちぬあゆみ
ぬ何のにほひぞ

○ みだれ降る大ぞらの星そのもとの山また山
の闇を汽車行く (伊賀を越ゆ)

○ 峽出でて汽車海に添ふ初秋の月のひかりの
やや青き海 (駿河を過ぐ)

✓ 草ふかき富士の裾野をゆく汽車のその食堂
の朝の葡萄酒

✓ 晩夏の光しづめる東京を先づ停車場に見た
る寂しさ

舌つづみうてばあめつちゆるぎ出づをかし
や瞳はや酔ひしかも

とろとろと琥珀の清水津の國の銘酒白鶴瓶
あふれ出づ

灯ともせばむしろみどりに見ゆる水酒と申
すを君断えず酌ぐ

くるくると天地めぐるよき顔も白の瓶子も
酔ひ舞へる身も

酌とりの玉のやうなる小むすめをかかえて
舞はむ青だたみかな

女ども手うちはやして泣上戸泣上戸とぞわ
れをめぐれる

こは笑止八重山ざくら幾人の女のなかに酔ひ泣く男

あな可愛ゆわれより早く酔ひはてて手枕のまま彼女ねむるなり

睡れるをこのまま盗みわだつみに帆あげてやがて泣く顔を見む

酔ひはててはただ小をんなの帯に咲く緋の大輪の花のみが見ゆ

酔ひはてては世に憎きもの一も無しほとほとわれもまたありやなし

ああ酔ひぬ月が嬰子生む子守唄うたひくれずやこの膝にねむ

君が唄ふ『十三ななつ』君はいつそれにな
るかや嬰子うむかやよ

渴きはて咽喉は灰めく酔さめに前髪の子が
むく林檎かな

酒の毒しびれわたりしはらわたにあなここ
ちよや泌む秋の風

石ころを蹴り蹴りありく秋の街落日黄なり
酔醒めの眼に

もの見れば焼かむとぞおもふもの見れば消
なむとぞ思ふ弱き性かな

黒かみはややみどりにも見ゆるかな灯にそ
がひ泣く秋の夜のひと

立ちもせばやがて地にひく黒髪を白もとゆ
ひに結ひあげもせて

君泣くか相むかひゐて言もなき春の灯かげ
のもの静けさに

かりそめに病めばただちに死をおもふはか
なごこちのうれしき夕ゆふ (四首病床にて)

死ぬ死なぬおもひ迫る日われと身にはじめ
て知りしわが命かな

日の御神氷のごとく冷えはてて空に朽ちむ
日また生れ來む

夙く窓押し皁月のそらのうす青を見せよ看
護婦胸せまり來ぬ

女ありき、われと共に安房の渚に渡りぬ、われその
傍らにありて夜も晝も断えず歌ふ、明治四十年早春。

戀ふる子等かなしき旅に出づる日の船をか
こみて海鳥の啼く

山ねむる山のふもとに海ねむるかなしき春
の國を旅ゆく

春や白晝日はうらかに額にさす涙ながし
て海あふぐ子の

岡を越え眞白き春の海邊のみちをはしれり
ふたつの人車

9
海哀し山またかなし酔ひ痴れし戀のひとみ
にあめつちもなし

海死せりいづくともなき遠き音の空にうご
きて更けし春の日

ああ接吻海そのままに日は行かず鳥翔ひな
がら死せ果てよいま

接吻くるわれらがまへにあをあをと海なが
れたり神よいづこに

山を見よ山に日は照る海を見よ海に日は照
るいざ唇を君

いつとなうわが肩の上にひとの手のかかれ
るがあり春の海見ゆ

聲あげてわれ泣く海の濃みどりの底に聲ゆ
けつれなき耳に

○ わだつみの白晝ひるのうしほの濃みどりに額ぬかう
ちひたし君戀ひ泣かむ

○ 忍びかに白鳥しらとり啼けりあまりにも風かぜぎはてし
海を怨うらずるがごと

○ 君笑めば海はにほへり春の日の八百や潮しほども
はうちひそみつ

○ わがこころ海に吸はれぬ海すひぬそのたた
かひに瞳かは燃ゆるかな

○ こころまよふ照る日の海へ中ぞらへうれひ
ぬむれる君が乳ちの邊へ

○ 眼をとちつ君樹によりて海を聴くその遠とほき
音かになにのひそむや

砂濱の丘をくだりて松間ゆくひとのうしろ
を見て涙しぬ

ともすれば君口無しになりたまふ海な眺め
る海にとられじ

君かりにかのわたつみに思はれて言ひよら
れなばいかにしたまふ

涙もつ睡つぶらに見はりつつ君かなしきを
なほ語るかな

君さらに笑みてもものいふ御頬の上にながる
る涙そのままにして

このごろの寂しきひとに強ひむとて葡萄の
酒をもとめ來にけり

○ 松透きて海見ゆる窓のまひる日にやすらに
睡る人の髪吸ふ

○ 闇冷えぬいやがうへにも砂冷えぬ渚に臥し
て黒き海聴く

○ 闇の夜の浪うちぎはの明るさにうづくまり
わて蒼海を見る

○ 空の日に浸みかも響く青青と海鳴るあはれ
青き海鳴る

○ 海を見て世にみなし兒のわが性は涙わりな
しほほえみて泣く

○ 白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染
まずただよふ

夜半の海汝はよく知るや魂一つここに生き
ゐて汝が聲を聴く

かなしげに星は降るなり戀ふる子等こよひ
はじめて添寝しにける

ものちほく言はずあちゆきこちらゆきふた
りは哀し貝をひろへる

渚ちかく白鳥群れて啼ける日の君がかほよ
り寂しきはなし

浪の寄る眞黒き巖にひとり居て春のゆふべ
の暮れゆくを見る

夕海に鳥啼く闇のかなしきにわれら手とり
ぬあはれまた啼く

鳥行けりしづかに白き羽はねのしてゆふべ明ある
き海うみのあなたへ

夕ゆふやみの磯いそに火かを焚たく海うみにまよふかなしみ
どもよいざよりて來きよ

春はるの海うみほのかにふるふ額かぶ伏ふせて泣なく夜よのさ
まの誰たれが髪かみに似にむ

ことあらば消けなむとやうにわが前まへにひたす
らわれをうかがふ君きみよ

君きみはいまわが思おもふままよるこびぬ泣なきぬあ
はれや生なくとしもなし

君きみよ汝なが若わかき生いのち命めいは眼まなこをとぢてかなしう睡ねむ
るわが掌たなこに

わがまへに海よこたはり日に光るこのかな
しみの何にをののく

海岸の松青き村はうらがなし君にすすめむ
葡萄酒の無し

わがうたふかなしき歌やさこえけむゆふべ
渚に君も出て来ぬ

くちづけの終りしあとのよこ顔にうちむか
ふ晝の寂しかりけり

いかなれば戀のはじめに斯くばかり寂しき
ことをおもひたまへる

伏目して君は海見る夕闇のうす青の香に髪
のぬれずや

しちづけはるわかりーか来あめつちにかつりまはれ
伊勢物語
よきよ

けすなちき けすなちき
 君こそよわ 君こそよわ
 うしくは 日 日は海に落ちゆく君よいかなれば斯くは悲
 しきいざや しさいざや しさいざや しさいざや

白晝さびし木この間に海うみの光ひかりる見て真ま白しろき君
 が額かぶのうれひよ

「木この香かほにやいな海うみならむ樹こ間まがくれかすか
 に浪なみの寄よる音ねさこゆる」

幾千いくせんの白羽しろはねみだれぬあさ風かぜにみどりの海うみへ
 日ひの大おほぞらへ

いづくにか少女おとめ泣なくらむその眸まなこのうれひ湛た
 えて春はるの海風うみかぜぐ

海うみなつかし君等きみらみどりのこのそここにも
 来こずやといふに似にて風かぜぐ

○ 直吸ひに日の光吸ひてまひる日の海の青燃
ゆわれ巖にあり

○ 海の聲そらにまよへり春の日のその聲のな
かに白鳥の浮く

○ 海あをし青一しづく日の瞳に點じて春のそ
ら匂はせむ

○ 春のそら白鳥まへり嘴紅しついでばみてみよ
海のみどりを

○ 燐枝すりぬ海のなぎさに倦み光る晝の日の
もと青き魚焼く

○ 春の河うす黄に濁り音もなう潮満つる海の
朝風に入る

○ 暴風雨あとの磯に日は冴ゆなにものに驚か
されて犬長う鳴く

○ 白晝の海古びし青き糸のごとたえだえ響く
寂しき胸に

○ 月つひに吸はれぬ曉の蒼穹の青さに海の音
とほく鳴る

○ 手をとりにてわれらは立てり春の日のみどり
の海の無限の岸に

○ 春の海のみどりうるみぬあめつちに君が髪
の香満ちわたる見ゆ

○ 御ひとみは海にむかへり相むかふわれは夢
かも御ひとみを見る

○ 白き鳥ちからなげにも春の日の海をかけれ
り君よ何おもふ

○ 眞晝時青海死にぬ巖かげにちさき貝あり妻
をあさり行く

○ 夕ぐれの海の愁ひのしたたりに浸されて瞳
は遠き沖見る

○ 蒼ざめし額にせまるわたつみのみどりの針
に似たる匂ひよ

○ 海明り天にえ行かず陸に來ず闇のそこひに
青うふるへり

○ ふと袖に見いてし人の落髪を唇にあてつつ
朝の海見る

ひもすがら断えなく窓に海ひびく何につか
れて君われに倚る

海女の群からすのごときなかにゐて貝を買
ふなりわが戀人は

渚なる木の間ゆきゆき摘みためし君とわが
手の四五の菜の花

くちつけは永かりしかなあめつちにかへり
来てまた黒髪を見る

春の海さして船行く山かげの名もなき港
の鐘鳴る

—以—上—

窓ひとつ朧ろの空へ灯をながす大河沿の春
の夜の街

鐘鳴り出づ落日のまへの擾亂のやや沈みゆ
く街のかたへに

仁和寺の松の木の間をふと思ふうらみつか
れし春の夕ぐれ

琴弾くか春ゆくほどにも言はぬくせつき
そめし夕ぐれの人

大ぞらの神よいましがいとし兒の二人戀し
て歌うたふ見よ

君を得ぬいよいよ海の涯なきに白帆を上げ
ぬ何のなみだぞ

○あな沈む少女の胸にわれ沈むああ聴けいづ
く悲しめる笛

○みだれ射よ雨降る征矢をえやは射るこの静
ごころこの戀ごころ

○吹き鳴らせ白銀の笛春ぐもる空裂けむまで
君死なむまで

○君笑むかああやごとなし君がまへに戀ひ狂
ふ子の狂ひ死ぬ見て

○山動け海くつがへれ一すぢの君がほつれ毛
ゆるがせはせじ

○みじろがでわが手にねむれあめつちになに
ごともなし何の事なし

に
り

われら兩人相添うて立つ一點に四方のしじ
まの吸はるるを聴く

思ひ倦みぬ毒の赤花さかづきにしほりてわ
れに君せまり來よ

矢繼早火の矢つがへてわれを射よ満ちて腐
らむわが胸を射よ

しほりてわ
れに君せまり來よ

生ぬるき戀の文かな筆もろともいざ火に焼
かむ爐のむらむら火

胸せまるあな胸せまる君いかにともに死な
ずや何を驚く

千代八千代棄てたまふなと云ひすててつと
わが手枕きはや睡るかな

○ 針のみみそれよりちさき火の色の毒花咲く
は誰が唇くちびるぞ

○ ひたぶるに木枯こがらしすさぶ斯かる夜を思ひ死なむ
ずわが愚鈍ぐどん見よ

○ こよひまた死ぬべきわれかぬれ髪のかげな
る眸まなこの満みち干ひる海に

○ いざこの胸千々に刺し貫ぬき穴すだらけのそを
玩もてあそべ春の夜の女

○ 「女なればつつましやかに」「それ憎しなどわ
れ焼やかう火の言葉せぬ」 明あきをけり

黒髪に毒あるかをりしとしとにそそぎて侍
れ花ちるゆふへ

悲し悲し火をも啖ふと戀ひくるひ斯くやす
らかに抱かれむこと

○ 戀ひ狂ひからくも獲ぬる君いだき恍けし顔
の驚愕を見よ

○ とこしへに逃ぐるか戀よとこしへにわれ若
うして追はむ汝を

○ 紅梅のつめたきほどを見たまへとはや馴れ
て君笑みて唇よす

○ 涙さびし夢も見ぬげにやすらかに寝みだれ
姿われに添ふ見て

○ 春は來ぬ戀のほこりか君を獲てこの月ごろ
の悲しきなかに

夕ぐれに音もなうゆらぐさみどりの柳かさ
びしよく君は泣く

床に馴れ羽おとろへし白鳥のかなしむごと
くけふも添寝す

疑ひの野火しめじめと胸を這ふ風死せし夜
を消えみ消えずみ

君かりにその黒髪に火の油そそぎてもなほ
われを捨てずや

髪を焼けその眸つぶせ斯くてこの胸に泣き
来よさらば許さむ

微笑鋭しわれよりさきにこの胸に棲みしあ
りやと添臥しの人

○ 悲しきか君泣け泣くをあざわらひあざわらひつつわれも泣かなむ

○ 燃え燃えて野火いつしかに消え去りぬ黒めるあとの胸の原見よ

○ さらばよし別るるまでぞなにごとこの難さか其處に何のねたまむ

○ 毒の木に火をやれ赤きその炎ちぎりて投げむよく睡る人に

○ 撒きたまへ灰を小砂利をわが胸にその荒るる見て手を拍ちたまへ

○ 手枕よ髪のかをりよ添ひぶしにわかれて春の夜を幾つ寝し

○ 別れ居の三夜は二夜はさこそあれかがなひ
て見よはや十日經む

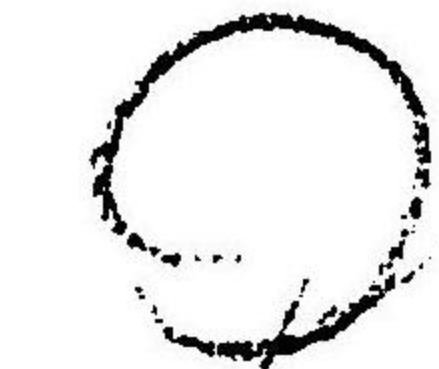
○ 思ふまま怨言つらねて彼女がまへに泣きは
え臥さで何を嘲むや

○ 君よなどさは愁れたげの腫して我がひとみ
見るわれに死ねとや

○ ただ許せふとして君に飽きたらず忌む日
もあれどいます斯くてあり

○ あらら可笑し君といたさて思ふこといふこ
となきにこの涙はや

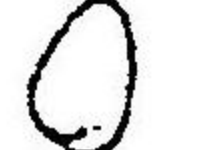
○ 毒の香君に焚かせてもろともに死なばや春
のかなしき夕



あめつちに乾^かびて一つわが唇も死して動か
ず君見ぬ十日



事もなういとしづやかに暮れゆきぬしみじ
み人の戀しきゆふべ



かへれかへれ怨^まじうたがひに倦^まみもせばい
ごこの胸へとく歸り來よ



あなあはれ君もいつしか眼^ま盲ひぬわれも盲^め
人の相いだき泣く



この手紙赤き切手をはるにさへこころとき
めく哀^{あは}しきゆふべ



さらば君いざや別れむわかれてはまたあひ
は見じいざさらばさらば

○ 君いかにかかる静けき夕ぐれに逝きなば人
のいかに幸あらむ

○ 夕ぐれの静寂しとしと降る窓にふと合ひぬ
唇のいつまでとなく

○ 戀しなばいつかは斯る憂を見むとちもひし
昨のはるかなるかな

○ わりもなう直よるこびてわが胸にすがり泣
く子が髪のやつれよ

○ 心ゆくかぎりをこよひ泣かしめよものな言
ひそね君見むも憂し

○ 添臥に馴れしふたりの言も無うかなしむ家
に櫻咲くなり

○「君よ君よわれ若し死なばいづくにか君は行くらむ」手をとりにていふ

○春哀し君に棄てられはるばると行かばや海
のあなたの國へ

○知らず知らずわが足鈍る君も鈍る戀の木立
の静寂のなかに

○怨むまじや性は清水のさらさら淺かる君
をなにうらむべき

○戀人よわれらはさびし青ぞらのもとに涯な
う野の燃ゆるさま

○われ歌をうたへりけふも故わかぬかなしみ
どもにうち追はれつつ

○
みな人にそむきてひとりわれゆかむわが悲
しみはひとにゆるさじ

○
君見ませ泣きそぼたれて春の夜の更けゆく
さまを眞黒き樹樹を

○
雪暗うわが家つつみぬ赤赤と炭燃ゆる夜の
君が髪かみの香か

○
然まなり先づ春消えのこる松まつが枝えの白しろの深ふか雪ゆき
の君とたたへむ

○
君きみ来こずばこがれてこよひわれ死しなむ明日あすは
明あ後ご日には誰たれ知らむ日を

○
泣なきながら死しにて去いにけりおん胸むねに顔かほうつ
めつつ怨うらみむし子は

○ ちもひみよ青海なせるさびしさにつつまれ
あつつ戀ひ燃ゆる身を

○ 戸な引きそ戸の面は今しゆく春のかなしさ
満てり來よ何か泣く

○ 狂ひつつ泣くと寝ざめのしめやけき涙いづ
れが君は悲しき

○ 鳥は籠君は柱にしめやかに夕日を浴びぬな
ど啼かぬ鳥

○ 煙たつ野ずえの空へ野樹いまだ芽ふかぬ春
のうるめるそらへ

○ はらはらに櫻みだれて散り散れり見あつ
何のちもひ湧かぬ日

蛙鳴く耳をたつればみんなみにいなまた西
に雲白き晝

朱の色の大鳥あまた浮きいでよいま晩春の
日は空に儺ゆ

あな寂し縛められて黙然と立てる巨人の石
彫まばや

つかれぬる胸に照り来てほのかをるゆく春
ごろの日のにほひかな

田のはづれ林のうへのゆく春の雲の静けさ
蛙鳴くなり

汪洋と濁れる河のひたながれ流るるを見て
眼をひらき得ず

○ 酔ひはてぬわれと若さにわが戀にこころな
にぞも然かは悲しむ

○ 聳やげる阜月のそらの樹の梢に幾すぢ青の
糸ひくか風

○ わくら葉か青さが落ちぬ水無月の死しぬる
白晝の高榿の樹ゆ

○ 鷺を啼く阜月の朝の淺みどり揺れもせなく
や鷺空に啼く

○ 水ゆけり水のみぎはの竹なかに白鷺啼けり
見そなはせ神

○ いと幽けく濃青の白日の高ぞらに鷲啼くさ
こゆ死にゆくか地

○ 一すぢの糸の白雪富士の嶺に残るが哀し水
無月の天

○ 風わたる見よはつ夏のあを空を青葉がうへ
をやよ戀人よ

○ 山を見さ君よ添寝の夢のうちに寂しかりけ
り見も知らぬ山

○ 人棲まで樹樹のみ生ひしかみつ代のみどり
照らせし日か天をゆく

○ われ驚くかすかにふるふわたつみの青さを
眺めわが脈搏に

○ 掬てられて人てふものの爲すべきをなしつ
つあるに何のもたえぞ

○ 地のうへに生けるものみな死にはてよわれ
ただ一人日を仰ぎ見む

○ われ敢て手もうごかさず寂然じやくねんとよこたはり
るむ燃えよ悲しみ

われ死なばねがはくあとに一點いちてんのかげもと
どめで日にいたりてむ

○ 雲見れば雲に木見れば木に草にあな悲しみの
かげ燃えわたる

○ わが胸の底の悲しみ誰知らむただ高笑ひ空
なるを聞け

○ ひしろわれけものをねがふ思ふまま地の上
這ひ得るちからをねがふ

かなしみは死にゆきただち神にゆきただひ
とすぢに久遠に走る

あれ行くよ何の悲しみ何の悔い犬にあるべ
き尾をふりて行く

天の日に向ひて立つにたへがたしいつはり
にのみ満ちみてる胸

山の白晝われをめぐれる秋の樹の不斷の風
に海の青憶ふ

月光の青のうしほのなかに浮きいや遠ざか
り白鷺の啼く

月の夜や君つつましうねてさめず戸の面の
木立風眞白なり

十五夜の月は生絹の被衣して男をみな寝
し國をゆく

白晝のごと戸の面は月の明う照るこは灯
の國君とぬるなり

君睡れば灯の照るかぎりしづやかに夜は匂
ふなりたちばなの花

寝すがたはねたし起すもまたつらしとつと
いつして蟲を聴くかな

ふと蟲の鳴く音たゆれば驚きて君見る君は
美しう睡る

君ぬるや枕のうへに摘まれ來し秋の花ぞと
灯は匂やかに

○ 美しうねむれる人にむかひゐてふと夜ぞか
なし戸に月や見む

○ 眞寔日のひかりのなかに燃えさかる炎か哀
しわが若さ燃ゆ。

○ 狂ひ鳥はてなき青の大空おほぞらに狂へるを見よく
るへる女

○ 玉ひかる純白まじろの小鳥たえだえに胸むねに羽はねうつ
寂さびしき眞寔

○ 秋の風木立にすさぶ木のなかの家の灯かけ
にわが脈みやくはうつ

○ つとわれら黙もだしぬ灯かけ黒かみのみどりは
匂ふ風過ぎて行く

われらややに頭をたれぬ胸二つ何をか思ふ
夜風遠く吹く

風消えぬ吾もほほゑみぬ小夜の風聴きゐし
君のほほゑむを見て

つと過ぎぬすぎて聲なし夜の風いまか静か
に木の葉ちるらむ

風落ちぬつかれて樹樹の風ぎしづむ夜を見
よ少女さびしからずや

風風ぎぬ松と落葉の木の叢のなかなるわが
家いざ君よ寝む

別

離

下

卷

自明治四十一年四月
至同四十三年一月

いざ行かむ行きてまだ見ぬ山を見むこのさ
びしさに君は耐ふるや

いづくよりいづくへ行くや大空の白雲のご
と逝きし君はも (三首獨歩氏を悼む)

仰ぎみる御そら庭の樹あめつちの冷かなり
や君はるまさず

君ゆけばむらがりたちて静けさの盡くるを
知らず君追ふとおもふ

みんなみの軒端のそらに日輪の日ごとかよ
ふを見て君と住む

おのづから熟みて木の實も地に落ちぬ戀の
きはみにいつか來にけむ

女あり石に油をそそぎては石焼かむとす見
るがさびしき

いざ行かむ行衛は知らねとどまらばかなし
かりなむいざ君よ夙く

○ 若ければわれらは哀し泣きぬれてけふも
たふよ戀ひ戀ふる歌

うらかなしこがれて逢ひに來しものを驚き
もせてひとのほほゑむ

悲しまず泣かずわらはぬ晝夜に馴れしかい
まはさびしくもなし

うちしのび夜汽車の隅にわれ座しぬかたへ
に添ひてひとのさしぐむ (以下或る時に)

野のおくの夜の停車場を出てしときつとこ
そ接吻をかはしてしかな

摘みてはすて摘みてはすてし野のはなの我
等があとにとほく續さぬ

山はいま遅き櫻のちるころをわれら手とり
て木の間あゆめりき

鬢の毛に散りしさくらのかかるあり木のか
げ去らぬゆふぐれのひと

木の芽摘みて豆腐の料理君のしぬわびしか
りにし山の宿かな

春の日の満てる木の間のうち立たすおそろ
しきまでひとの美し

小鳥よりさらに身かるくうつくしく哀しく
春の木の間ゆく君

静かなる木の間にもに入りしときこそ
しきりに君を憎めり

君すててわれただひとり木の間より岡にい
づれば春の雲見ゆ

山やまの家の障子細目こまめにひらきつつ山見るひと
をかなしくぞ見し

ゆく春の山あかに明ある雨かぜのみだるるを見て
さびしむひとよ

狭みどりのうすき衣ころもをうち着きせむくちづけ
はてて夢見るひとに (以上)

古寺の木立こたてのなかの離れ家はなれやに棲すみて夜ごと
に君を待ちにき

ものごしに静けさいたく見えまざるひとと
棲みつつはつ夏に入る

樹樹ききの間に白雲見ゆる梅雨晴つゆはらの照る日の庭
に妻は花植うう

し
くちつけをいなめる人はややとほくはなれ
て窓に初夏しよかの雲見る

わが妻はつひにうるはし夏たてば白しろき衣きぬき
てやや瘦しよせてけり

香爐かうろささげ初夏しよかの日のわらはたち御みそらあ
ゆめり日の静かなる

はつ夏の雲あをそらのをちかたに湧わきいづ
る晝ひる麥の笛吹く

燐枝すりぬ赤き毛蟲を焼かむとてただ何と
なくくるしきゆふべ

とこしへに解けぬひとつの不思議の生き
てうごくみづかと自らをおもふ

はたた神遠鳴りひびき雨降らぬ赤きゆふべ
をひとり酒煮る

夕されば風吹きいてぬ闇のうちの樹梢見る
つつまたおもひつぐ

夕やみのややに明るみ大ぞらに月のかかれ
ばやや思ひ風ぐ

ひとりなればこのもちつきの夏の夜のすず
しきよひをいざひとり寝む

八月の初め信州輕井澤に遊びぬ、その頃歌め
る歌三十首。

火を噴けば淺間の山は樹を生ま^うず茫^{ぼう}として
立つ青^{あを}天地^{あめつち}に

天地の静寂^{しじま}わが身にひたせまるふもと野に
居て山の火を見る

八月や淺間が嶽の山すそのその荒原^{あはら}にとこ
なつの咲く

麓なる山のひとつのいただきの青深^{あそふか}草^{くさ}に寝
て淺間見る

夢も見ず旅寝かさねぬ火の山の裾の月夜の
白き幾^{いく}夜^よを

火の山の裾の松原月かげの疎き月夜をほと
とぎす啼く

火の山やふもとの國に白雲の居る夜のそら
の一すぢの煙

大ぞらに星のふる夜を火の山の裾に旅寝し
妻をしぞ思ふ

夜となればそらを掩ひて高く見ゆ白晝は低
しけむり噴く山

火の山にしばし煙の断えにけりいのち死ぬ
べくひとのこひしき

の女ありみやこにわれを待つときく静かなり
けり山の火を見る

月見草見ゐつつ居ればわかれ來し妻が物思
ふすがたしぬばゆ

黒髪のそのひとすぢのこひしさの胸になが
れて盡さむともせず

わかれ來て幾夜^{いくよ}経ぬると指折れば十指^{とゆび}に足
らず夜のながさかな

ゆるしたまへ別れて遠くなるままにわりな
さままにうたがひもする

青草のなかにまぢりて月見草^{つきみくさ}ひともと咲く
をあはれみて摘む

あめつちにわが聲^{こゑ}音^ねのみ満ちわたる夕^{ゆふた}の野
なり月見草摘む

ものをおもふ四方の山べの朝ゆふに雲を見
れどもなぐさみもせず

紅滴る桃の實かみて山すその林ゆきつつ火
の山を見る

蟲に似て高原はしる汽車のありそらに雲見
ゆ八月の晝

白雲のいざよふ秋の峯をあふぐちひさなる
かな旅人どもは

糸のごとくそらを流るる杜鵑あり聲にむか
ひて涙とどまらず

うつろなる命をいだき眞晝野にわが身うご
めさ杜鵑聴く

ほととぎす聴きつつ立てば一滴ひとしずくのつゆより
寂しわが生くが見ゆ

わかれては十日ありえずあわただしまた碓うす
氷越え君見むと行くまじり片の冥みやう様さまもしも様さま

胸にただ別れ來しひとしのばせてゆふべの
山をひとり越ゆなり

瞰下みくだせば霧に沈めるふもと野の國のいづく
ぞほととぎす啼く

身じろがずしばしがほどを見かはせり旅の
をとこと山の小蛇こへびと

秋かぜや碓氷のふもと荒れ寂びし坂本まきもとの宿しゆく
の糸繰いとくの唄うた (坂本に宿りて)

まひる日の光のなかに白雲はうづまきてあ
りふもと國原くにばら (妙巖山にて)

旅たびとはふるきみやこの月の夜の寺の木の
間まを飽あかずさまよふ (三首奈良にて)

はたご屋やへ杜もりの木の間の月の夜の風のあは
れに濡ぬれてかへりぬ

伏ふしをがみふしをがみつつ階きざはしのゆふべのや
みにきえよとぞおもふ

大いなるうねりに船の載のれるとき甲板かたはんにゐ
て君をおもひぬ (播磨灘にて)

戀人のうまれしといふ安藝の國の山の夕日ゆふひ
を見て海を過ぐ (瀬戸にて)

とき折りに淫^{まよ}唄^{うた}うたふ八月の燃ゆる濱ゆき
燃ゆる海見て (五首故郷にて)

峰あまた横ほり伏せる峽^{せま}間の河越えむとし
蜩^{ひぐらし}を聴く

父の髪母の髪みな白み來ぬ子はまた遠く旅
をおもへる

雲去ればもののかげなくうす赤き夕^{ゆふ}日の山
に秋風を吹く

星くづのみだれしなかにおほどかにわが帆^ほ
柱^{はしら}のうち揺^ゆぐ見ゆ

蓄音機^{たたくき}ふとしも船の一室^{いっしつ}に起るがきこゆ海
かなしけれ

なにもものに欺かれ來しやこの日ごろ口惜し
腹立たし秋風を聴く

秋立てとよそよそしくもなりにけり風は吹
けども葉は落つれども

とも思ひかくもおもへどとにかくにおもひ
さだめて幸祝せむ

いねもせて明かせる朝の秋かぜの聲にまぢ
りてすすめ子の啼く

うらさびし盡さなく行ける大河のほとりに
ゆきて泣かむとぞおもふ

聞うれしこよひ離根のこほろぎの身にしむ
ままに出でて聴くかな

霧ふればけふはいつより暮はやきゆふべな
りけりこぼるぎの鳴く

時として涙をおぼゆ草木の悠悠として日を
浴ぶる見て

消えやらぬ大あめつちの生物のひとつのわ
れに秋かぜぞ吹く

君がすむ戀の國邊とわが住める國のさかひ
の一すぢの河

白粉と髪のにほひをささわけむ静かなる夜
の黄なるともしび

夕ぐれの街をし行けばそそくさと行きかふ
人に眼も鼻も無し

わが胸に旅のをとこの錆^{じよ}のころやど
りてそそのかすらく

物おもへばこの茫^{ぼう}漠^{ぼく}のあめつちにわれただ
獨り生くとさびしき

秋たてば街のはづれの檜^{ひの}の木^の木立^{こだち}に行き
てよくものをおもふ

わがこころ行くにまかせてゆかしめよ世に
これよりのなぐさめは無し

蠟燭^{ろうそく}の灯^{あかり}の穂^ほ赤^{あか}きをつくづくと見つめゐて
ふと秋風をさく

めぐりあひしづかに見守^{まも}りなみだしぬわれ
とわれとのころとこころ

秋晴のまちに逢ひぬる乞食の爺の眸見て旅
をおもひぬ

牛に似てもものもおもはず茫然と家を出づれ
ば秋かぜの吹く

野菊ぞとさも媚びなよるすがたして野に咲
く見れば行きもかねつる

湯槽より窓のガラスにうつりたる秋風のな
かの午後の日を見る

落初めの桐のひと葉のあをあととひろきが
うへを夕風のゆく

人の聲車のひびき満ちわたるゆふべの街に
落葉するなり

秋かぜは空をわたれりゆく水はたゆみもあ
らず葦刈る少女

足とめて聽けばかよひ來河むかひ枯葦のな
かの葦刈の唄

魚釣るや晩取河のながれ去り流れさる見つ
つ餌は取られがち

わたの原生れてやがて消えてゆく浪のあを
きに秋かぜぞ吹く

相むかひ世に消えがたきかなしみの秋のゆ
ふべの海とわれとあり

ゆふぐれの沖には風の行くあらむ屍のごと
く松にもたるる

音もなうゆふべの海のをちかたの闇のなか
ゆく白き波見ゆ

行き行きて飽きなば旅にしづやかにかへり
みもなく死なむとぞおもふ

ひたすらに君に戀しぬ白菊も紅葉も秋はも
ののさびしく

病みぬれば世のはかなさをとりあつめ追は
るるがごと歌につづりぬ

あれ見たまへこのもかのも物かげをしの
びしのびに秋かぜのゆく

少女子のむねのちひさきかなしみに溺れて
われは死にはててけり

君見れば獸けもののこどくさいなみぬこのかなし
さをやるところなみ

なほ飽かずいやなほあかず苛さいなみぬ思ふま
なるこの女なんなゆゑ

長椅子ながいすにいねて初冬はつふゆ午後ごごの日を浴あぶるに似
たる戀づかれかな

なにもものに追はれ引かれて斯く走はしるをもし
ろきこと世に一もなし

この林檎りんごつゆしたたらばありし日のなみだ
に似むどわかき言こといふ

あはれそのをみなはたえの肌はだしらずして戀のあは
れに泣きぬれし日よ

あはれ神ただあるがままわれをしてあらし
めたまへ他にいのる無し

かかる時聲はりあげてかなしさを歌ふ癖あ
りきそれも止みつる

わが住むは寺の裏部屋庭もせに白菊さけり
見に来よ女

消えもせず戀の國より追はれ來し身にうつ
り香のあはくかなしく

見かへるな戀の世界のたふとさは揺れずし
づかに遠ざかりゆく

世に最もあさはかなればとりわけて女の泣
くをあはれとぞおもふ

黒牛の大いなる面とむかひあひあるがごと
くに生くにつかれぬ

ほこり湧く落日の街をひた走る電車のすみ
のひとりの少女

仰ぎみてころどながる街の樹の落日のそ
らにおち葉するあり

われうまれて初めてけふぞ冬を知る落葉の
ころなつかしきかな

落ちし葉のひと葉のつぎにまた落ちむ黄な
る一葉の待たるるゆふべ

あめつちの静かなる時そよろそよろ落葉を
わたるゆふぐれの風

早やゆくかしみじみ汝なれにうちむかふひまも
なかりきさらばさらば秋

忍び来てしのびて去いにぬかの秋は盲目めしひなり
けりものいはずけり

大河おほかほのうへをながるる一葉たよのちち葉はのごと
しものもおもはず

わが妻よわがさびしさは青のいろ君がもて
るは黄朽葉きくらはならむ

めぐりあひふと見交みかはして別れけり落葉林おちのはやしの
をとこと男 (月山が原にて)

冬木立ふゆこたて落葉のうへに晝寝ひるねしてふと見しゆめ
のあはれなりしかな